巻頭言

〈小特集〉
2020 東京オリンピック後のアーバンスポーツ / ライフスタイルスポーツ研究の展望と課題：
パルクール・スケートボード・都市空間

Special Issue：
Perspectives and issues in Urban sports /
Lifestyle sports studies after the 2020 Tokyo Olympics:
Parkour, Skateboarding and Urban space.

COVID-19 の感染拡大によって、1 年程度延期された 2020 東京夏季オリンピックは、2021 年 7 月 23 日に開幕し、8 月 8 日に閉幕した。それから、約半年後の 2022 年 2 月 4 日に 2022 北京冬季オリンピックが開幕し、2 月 20 日に閉幕した。COVID-19 の感染拡大が理由とは言え、このような慌ただしいスケジュールで夏季と冬季のオリンピックが開催されたが、それぞれの大会が私たちに強烈なインパクトをもたらしたといっても過言ではない。

たとえば、夏季大会でも冬季大会でもライフスタイルスポーツ競技・種目におけるオリンピアンの活躍は、私たちにライフスタイルスポーツの魅力を存分にアピールした。たとえば、スケートボードでは「ストリート」において堀米雄斗選手、西矢椛選手が金メダルを獲得し、「パーク」では四十住さくら選手が金メダルを獲得した。さらに、2020 東京夏季大会にはスケートボードのパークに出場―結果は 8 位入賞―し、2022 北京冬季大会ではスノーボードのハーフパイプに出場し、「トリプルコーク 1440」という難易度の高いトリックをメイクし、金メダルを獲得した平野歩夢選手の「二刀流」の活躍に、多くの人々は魅了された。

このように、オリンピックにおいてライフスタイルスポーツでのメダル獲

得の可能性や期待が高まっていくと、人々の関心は、どこに向かっていくのだろうか。当然の帰結と言えるのかもしれないが、人々は、メダル獲得を確実なものにするために、ライフスタイルスポーツの競技力の向上や高度化へと関心を高めていくことになる。同時に、このようなライフスタイルスポーツのスポーツ化は、愛好者や実践者による「反発」を改めて生じさせてくることになる。

このような背景のもと、私たちアーバンスポーツ研究会は、立命館大学人文科学研究所助成プログラムの最終年度という活動総括の時期を迎え、「2020 東京オリンピック後のアーバンスポーツ / ライフスタイルスポーツ研究の展望と課題：パルクール・スケートボード・都市空間」という総括的なテーマを掲げ、本特集号に向けて研究会活動を進めてきた。

まず、本特集号に収録される研究成果は、「パルクール研究の新たな地平：2020 東京五輪インパクトへの『対抗軸』を考える」というテーマを掲げ、2022 年 8 月 2 日にオンラインで開催されたワークショップである。本ワークショップは、まず、第 1 部として、3 名の登壇者による話題提供がなされ、第 2 部として、登壇者の報告を受けて、参加者全体でのディスカッションが実施された。本特集には、当日の報告 3 本とディスカッションの全てを収録させていただいた。

先にも述べたように、オリンピックでの好成績を反映して、ライフスタイルスポーツにおいて競技力の向上や高度化が重要な課題になってくると、自然科学をベースとしたスポーツ研究の成果が、ライフスタイルスポーツ研究にも積極的に導入されていくことが予想される。たしかに、これまで、ライフスタイルスポーツ研究といえば、人文科学系のアプローチや社会科学系のアプローチが多かったといえよう。しかし、今後、これまでのライフスタイルスポーツの研究成果をふまえながら、自然科学系のアプローチとどのような共同研究が可能となるかを考えてみようというのが、本ワークショップの狙いである。豊富な経験をもとに話題提供をしていただいた石沢憲哉氏（合

同会社 SENDAI X TRAIN 最高経営責任者（CEO））、塩見俊一氏（立命館大学非常勤講師、プロレスラー（「ダブプロレス」所属））、漆原良氏（立命館大学産業社会学部教授）、さらにワークショップ全体をファシリテートしていただいた上田滋夢氏（追手門大学社会学部教授）に感謝を申し上げたい。

続いて、本研究会メンバーによる 3 本の論稿の概要を紹介したい。まず、住田翔子氏（立命館大学産業社会学部准教授）の論稿「パルクールと創造する都市：《Jump London》（2003）の制作背景に注目して」では、パルクールが英語圏において爆発的に広がるきっかけとなった《Jump London》（2003）というドキュメンタリー、映像制作者による言葉、映像内容や形式、およびそれらと当時の社会背景との関係性を分析・考察している。

次に、三谷舜氏（中京大学スポーツ科学部任期制講師）の論稿「ボールパークからストリートへ：ベースボール型競技におけるアーバンスポーツ化の力学」では、オリンピックを中心としたスポーツに広まっている「アーバンスポーツ」が、旧来から実施されている近代スポーツに及ぼす影響を明らかにすることを目的とし、世界野球ソフトボール連盟（WBSC）により作られた、新たなベースボール型競技である Baseball 5 を題材とし、その分析・考察をしている。

最後に、市井吉興（立命館大学産業社会学部教授・アーバンスポーツ研究会代表）の論稿「ポスト 2020 のスケートボードスケープ：カンタン＝ブローの「預言」を越えるには？」では、2020 東京オリンピック後のスケートボードスケープ、つまり、スケートボードを取り巻く「風景」の変化を検討し、スケートボード研究の課題を整理している。

このように、今次の人文研紀要の特集号には、ワークショップ登壇者の話題提供とディスカッション、研究会メンバーによる論稿を収録させていただくが、これらは本研究会の活動の成果である。先にも述べたように、本研究会は助成プログラムの最終年度という活動総括の時期を迎えた。この 3 年間、これまでに発表されてきたライフスタイルスポーツ研究に学びながら、本研

究会が実施してきた様々な研究活動に対して寄せられたご指摘やご批判を糧にして研究活動を進め、その成果を『立命館人文科学研究所紀要：特集号パルクールの実践と研究最先端の身体文化／スポーツの発展と理解を目指して』（130 号、2022 年）とジェフリー・キダー氏の『パルクールと都市：トレイサーのエスノグラフィ』（ミネルヴァ書房、2022 年）を翻訳し、出版させていただいた。

これらの研究成果は、立命館大学人文科学研究所の運営に携わる教職員の方々の献身的なサポートなくして結実されることはなかった。また、翻訳の出版に関しては、立命館大学産業社会学会出版助成を頂戴することで、多大なる協力を賜ることとなった。この場を借りて、心より感謝申し上げる。

2023 年 3 月

立命館大学産業社会学部教授
アーバンスポーツ研究会代表
市井　吉興